

1 題材 歌詞と旋律が生み出す雰囲気を生かして歌おう～荒城の月～

2 指導の立場

＜子どもの実態から＞

子どもは、合唱や歌唱に意欲的であり、これまでに数曲の日本歌曲を学習してきた。「夏の思い出」では、比較的歌いやすい旋律とイメージしやすい尾瀬の情景とを手がかりに、強弱や速度記号に込められた思いを想像しながら、のびのびと歌唱することができた。「荒城の月」はこれまでの歌曲と大きく異なり、全体が短調であることや速度が遅いことで歌いづらいと感じるだろう。しかし、歌詞が表す情景や心情を思い浮かべることができれば、短調で速度が遅いからこそできる表現の工夫について考えることができるだろう。

＜題材について＞

本題材は、古くから歌い継がれてきた日本歌曲の美しさを感じながら歌うことをねらいとしている。栄枯盛衰を歌ったこの曲は、土井晩翠の詩に滝廉太郎が作曲をしたが、後に山田耕筰によって編曲されたものが発表された。原曲と編曲の主な違いは、速度と音程である。西洋音楽の先駆者である滝廉太郎が旋律の一音にシャープを使用したのは有名であるが、それに対して、山田耕筰は半音下げて編曲をした。半音の違いによってもたらされる曲調の違いを味わえる曲である。また、七五調で書かれた歌詞には、土井晩翠の「無常」の思いが描かれている。世の中の「無常」と、いつも変わらぬ月の美しさの対照を歌詞から感じ取ることで、短調の哀愁帯びた旋律を味わいながら表現を工夫することができると思う。

4 well-beingにつながる学びについて

本学園では、well-beingを「個人だけでなく、社会や地球環境まで含めた全体的に良好な状態」と捉えている。well-beingの実現には、教科等の本質に迫る授業で身に付けた資質・能力を、人生において自在に発揮できる子どもを育成することが必要不可欠である。そのためには、エージェンシー（変化を起こすために、自分で目標を設定し、振り返り、責任をもって行動する能力）の育成及び発揮が重要な課題であると考ええる。

本学園の音楽部では、音楽的な見方・考え方を働かせながら、仲間と協働して音や音楽に積極的に関わっていく子どもを育成する授業が、教科の本質に迫る授業と捉えている。また、エージェンシーを発揮している姿を、音楽的な見方・考え方を働かせながら曲の魅力を探り、試行錯誤しながら歌唱表現を工夫している姿だと捉えている。本教材においては、原曲と編曲を比較聴取して、日本歌曲の歌詞や旋律が生み出す雰囲気味わえるようにしたり、「なぜ、このような表現がしたいのか」を子ども同士でやりとりできる場面を設定したりする。仲間の表現方法を吟味したり、疑問をもったりすることで、自分が気付かなかった表現方法に出会い、仲間の良さを取り入れようとしたり、新たな表現方法を追究

6 本時案 ー第2次・1時分ー

- (1) 主眼 曲の背景を手がかりに根拠をもって伝え合う活動を通して、表現を工夫して歌唱できるようになる。
- (2) 準備 楽譜，タブレット端末
- (3) 学習の展開

学習活動・内容	予想される子どもの反応	指導上の留意点	分
1 滝廉太郎か山田耕筰，どちらの曲の表現を深めていくのか決める どちらの曲を			

(4) 評価基準と方法

曲の背景を手がかりに、表現方法について根拠をもって他者と伝え合ったり、表現したいことを歌唱で表そうとしたりしているか、活動の観察やジャムボードへの記入からみとる。

<メモ>

本題材の評価基準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
知 「荒城の月」の曲想と音楽の構造や歌詞の内容と関わりを理解している。 技 創意工夫した表現で「荒城の月」を歌うために必要な発声、発音、身体を使い方などの技能を身に付け、歌唱で表している。	思 「荒城の月」の旋律・速度を知覚し、それらの働きが生み出す特質や雰囲気を感じながら、知覚したことと感受したこととの関わりについて考え、「荒城の月」にふわさしい歌唱表現としてどのように表すかについて思いや意図をもっている	